



Lausanne/WEA  
Creation Care Network



洛桑運動東亞諮詢會議—關愛受造世界與福音  
2017 台灣

Lausanne/WEA East Asia Regional Conference  
on Creation Care and the Gospel  
in Taiwan 2017, 24-28 July



### The Forest is a Church

The forest is where the "roots" are,  
where life rises from the ground.  
Trees pierce the sky, like cathedral spires.  
Light filters down, as through stained glass.  
The forest canopy is lofty;  
much of it is over our heads.  
In common with churches,  
forests invite transcending the human world  
and experiencing a comprehensive, embracing realm.

Holmes Rolston III



## LWCCN/EAC の総括 [取扱留意]

LWCCN/EAC/IPWG

17.07.28 青木 勝

### 1. 広報概説(クリスチャン新聞 2017.08.xx の投稿記事案)

- 1) ローザンヌ運動の Issue Network(37)の一つである“Creation Care”は、WEA と共催し LWCCN を形成し地域会議を巡回。「Jamaica Call to Action(2012)を契機とする基本構想ガイドブック」[“Creation Care and the Gospel” (2016.05)] が編纂され Lausanne Library から発刊されている。ところが、東アジアの実態(業務機能のタスク事例とそれを通じた宣教協力の事例)について言及されていない状況にあった。今次東アジア会議 LWCCN/EAC では、日本・韓国・中国などの主要情報が補足され共有された。また、2020/2030/2050 をめざすビジネス宣教協力や Mission China 2030 など未来への展望や企画の主要情報が補足され共有された。これにより、世界や地域社会から求められているニーズや要件が包括的に捉えられる局面に至った。主な評価ポイントは、以下のとおり。
  - ① 対象範囲は、環境保全(主体)から、地域包括ケアや和解による再生、環境の予防に拡大する事例報告が Plenary や Workshop で実施された。更に、Anti-Creation Care Issue が緊急課題であるため、言及された。
  - ② 対象領域は、多文化共生社会における共存・協働により、社会変革・未来貢献を担う次世代グローバル人材を支える観点から、クリスチャンが取り組む世界のみならず、Islam/Hindu/Buddhism との協働によるチームワークまで言及された。
  - ③ 経緯は、Jamaica Call to Action(2012)以降のスケールに加え、歴史観と世界潮流をふまえ、1960s ~2010s の国際協力 60 年と整合する国連、ODA や NGO/NPO、事業体や宣教団体により先行推進されている動向とを携プロジェクト推進が先行する中で、宣教団体教会のプロジェクト推進がキャッチアップしている状況が把握された。
- 2) 東アジア会議は、地域会議かつ国際会議となった。日本は、日本の内外情報のみならず日韓連携や日中連携のプロジェクト情報、地域連携による Creation Care を提示した。
  - ① Prof. Richard Bauckham の講演は、被造物全体の和解と福音のインフラ整備となった。が、ビジネス宣教協力では前提要件として取り扱われており、サタンの攻撃やテロ防止・予防への激励が期待されており、神学的アプローチの課題となった。
  - ② Anti-Creation Care Issue について、日本の分科会のみが取組事例を提示。
- 3) ローザンヌ運動におけるロードマップとして、YLG(2016)に続き LWCCN/EAC(2017)は LCWE4(2020s)への重要な梃子となりエポックとなった。
- 4) 日本は、東京オリンピック(1964~2020)の期間、1960 年代から 2010 年代(1960s~2010s)の国際協力 60 年を通じた Creation Care の持続可能な宣教協力を実施してきた事例を報告。但し、それを個人ベースから教会ネットワークベースに拡大・加速させることが求められており、残課題である。
- 5) 日本の宣教協力の広報外交は、情報共有と祈祷連携により一層求められる。ローザンヌ運動は「(日本の)宣教協力の包括的な広報外交」を今後共担い続けるものであり、JLC 主催ローザンヌ・ビジョンリトリート(2017.08.21-22 箱根)のプログラムには、経緯(1960s-2010s)と現状(2010-2020)の分析



(2015-2017)と未来戦略(2020-2030)が組み込まれている。

- ① リオ+20：国連環境開発会議(地球サミット 1992)から 20 年目に、持続可能な開発及び貧困根絶の交渉における「グリーン経済」が主要テーマになった。
- ② UN/MDGS(2001～2015)、UN/SDGs(2030)と整合した LM/Issue Network の未来戦略：持続可能な開発のためのアジェンダ 2030 [17 goals/169 target、国連サミット (15.09.25-27 NY)] と COP21 パリ協定 [国連気候変動枠組条約第 21 回締結国会議(15.11.30-12.12 Paris)]
- ③ LCWE4(2020s)へのロードマップ：
  - ・ YLG3(16.08.03-10 Jakarta) for LCWE4(2020s), YLG2(Malaysia 2006) for LCWE3(2010 Cape Town), YLG1(Singapore 1987) for LCWE2(1989 Manila) and after LCWE1(1974)
  - ・ CTC と Issue Network の構成：CTC の見直し、Issue Network の見直しは、社会変革・未来貢献の開拓・開発過程における集約する包括的アプローチが求められている。
  - ・ Tokyo2020(中期目標)や 2030 目標の 2020 年代展開(長期目標)、来年度目標(短期目標)に向けた準備：新技術や新アーキテクチャによる未来イメージに向けた宣教協力
- ④ LM/Issue Network “Creation Care”のロードマップ：再定義と機能拡張
  - ・ South Asia(16.09.10-12 Nepal)
  - ・ East Asia Conference(17.07.24-28 Taipei)
  - ・ European Regional CC Conference(17.09.10-14 Les Courmettes near Nice)
  - ・ Southern Africa
  - ・ Eurasia(17.10.xx-xx)
- ⑤ 未来 2030 目標プロジェクトへの提言
  - ・ 次世代構想への提言(国連環境計画・金融イニシアティブ 1(UNEP Finance initiative))
- ⑥ その他
  - ・ Mission China 2030 <https://backtogod.net/stories/mission-china-2030>
  - ・ Finish The Mission <https://ftm2030.org/about/>
  - ・ Mission 2030 <http://hanafusa-fukuin.com/archives/1352> (聖イグナチオ教会)
  - ・ Saudi Vision 2030 <http://vision2030.gov.sa/en>

## 6) その他

## 2. LWCCN/EAC 東アジア会議の総括

- 1) 期間：17.07.24-28
- 2) 会場：臺灣基督長老教會聖經學院 新竹市高峰路 56 號 <http://www.pbc.org.tw/>  
Cf. 台湾基督長老教会 国際日語教会 <http://nichigo-church.com/>
- 3) 参加者：約 100～150 名(参加者：約 120 名、ボランティア：約 30 名)
- 4) 目的・要件
  - ① 目的は、神の創造された世界は、自然破壊と人工破壊、人工増加と資源消費増加による地球温暖化と生物多様性喪失、戦争やテロによる環境破壊やインフラ破壊に過去から現在そして未来へと直面し続ける中で、回復・復興・再生・再創造を繰り返しつつ只管前進している。課題が未解決のまま新たな課題がその上に重なる中で、宣教協力が拡大され福音が拡大されることが常に求められている。即ち、平和と持続可能な成長をめざし、多文化共生社会における共存・協働により社会変革・



## ローザンヌ運動

世界宣教のために影響力ある人々とアイデアを互いにつなげる

LWCCN EA Conference 参加者レポート

未来貢献を担う次世代グローバル人材を支えるため、未来 2020/2030/2050 に向けた宣教協力を推進し続けることが必要とされる。

- ② 要件は、ビジネス宣教協力を支えるディアスポラ宣教協力として、集約アプローチを提示する。世界の動向(UN、ODA や NGO/NPO)は、未来 2020/2030/2050 に向け多文化共生社会の社会変革や未来貢献を担う次世代グローバル人材を支える内外受け皿(国連や ODA、世界や日本の NGO である ADRC/DRLC など)が**先行推進される中、宣教団体や教会のネットワークがそれをキャッチアップし整合を図りつつ、連携・協力乃至単独でタスク推進し宣教協力が推進されている**。特に、日本の外交や国際ビジネスを担う国際家族や国際人は、3 世代にわたり平和と持続可能な開発を担い続けており、こうした世代に受け継がれたリーダーが主に立ち返るための宣教協力(ビジネス宣教協力というタスクを担うリソースを支えるディアスポラ宣教協力)が求められている。国内連携・地域連携・内外連携の事例を通じた宣教協力の実態を情報共有し、加速に向けた祈禱連携を推進することである。

### 5) ローザンヌ運動の経緯

- ① ローザンヌ運動は、ローザンヌ誓約(1974)、マニラ宣言(1989)、ケープタウン決意表明(2010)を通し、宣教は伝道と社会的責任であり、全福音・全教会・全世界へ展開し、更に全人・全領域の次元を取り扱う神の国の福音を提示。宣教会議は、伝道に関する世界会議(1966 Berlin)を基盤に、ローザンヌ世界宣教会議第 1 回 LCWE1(1974 Lausanne)、第 2 回 LCWE2(1989 Manila)、第 3 回 LCWE3(2010 Cape town)を経て、第 4 回 LCWE4(2020s)に向け推進。詳細な課題への取組みは、Issue Network(37 ケ)が並行推進。
- ② Issue "Creation Care"は、LCWE3 後に、Jamaica Call to Action(2012)を提示。ローザンヌ運動と世界福音同盟 WEA が主催し、「**被造物保護と福音ネットワーク**」Creation Care and the Gospel by Creation Care Network of Lausanne Movement/World Evangelical Association)を形成。OMF International と A Rocha International が共催する形で地域会議を推進。South Asia(16.09.10-12 Nepal)と East Asia(17.07.24-28 Taipei)を経て、Europe(17.09.10-14 Nice), Southern Africa, Eurasia(17.10.xx-xx)が開催予定。
- ③ 主催者 : LWCCN の東アジア会議 <http://lwccn.com/> は、Issue "Creation Care"(Ed Brown, Dave Bookless など)とローザンヌ東アジア地域コーディネータ(David Ro など)の連携において、国際企画グループ IPWG(Samuel Chiu, David Gould, Masaru Aoki, Atsuko Tateishi, Christina Chan)と開催地実行委員会の協働により推進。日本メンバは、日本ローザンヌ委員会・日本福音同盟 JLC/JEA の連携窓口 liaison として参画。

### 6) 日本グループの予実績

- ① Issue Network "Creation Care"の基本構想 : "Creation Care and The Gospel, Reconsidering The Mission of the Church, edited by Colin Bell and Robert S White, Foreword by Lascelles G Newman, Introduction by Edward R Brown"(May 2016)は、Jamaica Call to Action(2012.11)について編纂され Lausanne Library として発行された。この基本構想には、Jamaica Call to Action には東アジア主要国(日中韓など)の参加がなかった故か、**東アジアに関する事例・課題が言及されていない**。LCWE3(2010)や ALCOE7(2011)を通し日本代表が情報共有と祈禱連携を数年にわたり実施してきたが、**取り扱われなかった**。そこで、東アジア会議 LWCCN/EAC において LCWE3 や ALCOE7 における日本提案を再度提案すると共に重要な要件定





## ローザンヌ運動

世界宣教のために影響力ある人々とアイデアを互いにつなげる

LWCCN EA Conference 参加者レポート

義を提示するため、LWCCN/EAC/IPWG と分科会などのプログラムを通して経緯と事例を再提案し基本構想を補完したい。この編纂に参加している方で WCCN/EAC に参加する方々(Ed Brown, Richared Bauckham, Dave Bookless, David Gould, Ken Gnanakan, Lawrence Ko など)に対し、情報共有と祈祷連携を一層深めたい。

・ローザンヌ世界宣教会議第 3 回 LCWE3(2010.10 Cape Town)では、日本グループ(青木 勝)から同時期に日本で開催された COP10(生物多様性会議 2010.10 Nagoya)を重要課題とする祈祷カードを提出、スモールグループでも情報共有と祈祷連携を実施。

・アジアローザンヌ宣教会議第 7 回 ALCOE7(2011.05 Ulan Bator)では、主要課題が直前に発生した大震災〔阪神淡路地震(1995.01.17)や東日本大震災(2011.03.11)]の回復・復興・再生であった。そこで、日本グループ(正木牧人、青木 勝、立石充子、松崎ひかり)は、聖会講演、分科会、震災報告などのプログラムを通し、情報共有と祈祷連携を実施。また、アジア地域コーディネータ(Lawrence Ko)や分科会コーディネータ(Ken Gnanakan)に情報共有と祈祷連携を実施。

・Global Consultation on Creation Care and the Gospel(2012.10.29-11.02 Jamaica)には、復興・再生に注力するため JLC からは代表を派遣できなかった。

・Global BAM Congress(2013.04.25-28 Chiang Mai)では、個人参加しタスクとして Creation Care Issue & Anti-Creation Care Issue を照会した。

・Global Diaspora Network/Global Diaspora Forum(2015.03.24-28 Manila)では、個人参加しタスクとして Creation Care Issue & Anti-Creation Care Issue を照会した。

### ② LWCCN/EAC/IPWG

・ Issue “Creation Care”(Ed Brown, Dave Bookless など)やローザンヌ東アジア地域コーディネータ(David Ro など)へ、基本構想の補足を提案したが、プログラムの分科会、他に一部は採用され、一部は検討継続課題となった。

・テーマの範囲とレベル；環境保全は元より、地域包括ケア(医療、看護、介護、心のケア)や和解による再生、被造物保護への攻撃など、対象機能・業務の範囲やレベルの拡大を提案、事例把握とそれに伴う宣教協力ネットワークの多様と包括を提示した。日本担当の分科会で実現されたが、日本以外は環境保全主体に留まった。

・主要課題(多文化共生社会における他宗教との混成チームによる協働、Issue Network の整理と協働、国連や NGO による従前プロジェクトとの協働など)は、日本担当の分科会で実現されたが、日本以外は環境保全主体に留まった。

・ Issue Network として、BAM with GDN for Creation Care として BAM や GDN との関連付けを照会したが、他の Issue Network との調整はされていない実態が把握された。

・OMF のアイデアは事前に情報共有したが、地域各国の意向がプログラムに反映されたのは 1 ヶ月未満の直前となり、内容を事前に提示したのは日本グループの分科会など限定的な適用となった。

・Ed Brown 途中退場の中、IPWG が開催されず、OMF と A Rocha のメンバによるプログラム変更が実施された。

・IPWG の半年余りの準備：月次の Skype 会議を通して、日本からは毎回照会・提案を繰り返したが、香港や現地台湾からの提案がなかった。ところが、プログラムが 2 週間前によく公開された際、香港や台湾の提案・報告、英国本部の NGO の報告などが組み込まれるなど、事前調整に対し直前調整により大幅に変更が加えられた。各国の国内協働提案や東アジア諸国による協働提案



を検討するプログラムを組み込むには至らず、構想の情報共有に留まる。

- ③ 開催地連携：台湾基督長老教会 国際日語教会の礼拝出席と長期に亘る交流により、情報共有と祈禱連携を再整備し、日本グループへの長老参加を得て協力が拡大された。
- ④ LWCCN/EAC への提案として、宣教協力における内外連携事例を以下に提示。
  - ・ 連続する大震災の復興・再生を通じた国内連携：阪神淡路地震(1995.01.17)、東北大震災(2011.03.11)、熊本地震(2016.04.16, 2017.04.13)を通じた地域連携、国内連携およびディアスポラ連携、そして内外連携
  - ・ 日本伝道会議第 6 回の関連プロジェクトの並行推進による内外連携
  - ・ 環北西太平洋の海洋環境保全の日韓連携と奄美大島のサンゴ礁回復による太平洋広域連携；日韓連携として提案
  - ・ 地域包括ケアにおける小児在宅医療による国内連携とアジア地域連携
  - ・ 食から考える被造物保護
  - ・ 包括的アプローチ Inclusive approach(ビジネス宣教協力を支えるディアスポラ宣教協力)における日本人クリスチャンビジネスマンが関係する内外事例を通じた 国内連携と世界の地域連携、Anti-Creation Care Issue の提案

7) 日本グループ [参加者：12 名(日本から)+1 名(台湾から)=13 名]

- ① Regional Pictures(横田法路師)：熊本地震の災害支援につき感謝表明と報告を実施。
- ② TED plenary23 (住田裕師、小川真師)：JCE6 環境プロジェクトの取組状況を報告。
- ③ Breakout session/Workshop: 分科会
  - ・ A12(土島智幸医師): Care of Disabled people as Creation 地域包括ケアにおける小児在宅医療
  - ・ A22(石原謙治兄): A possibility to build theological ethics of food in East Asia 食糧危機・食品保全
  - ・ A31(李炯雨兄、青木勝兄): Environmental Conservation in Northwest Pacific Region 環北西太平洋の海洋環境保全と奄美大島のサンゴ礁回復事例の他地域展開
  - ・ B21(青木兄): Inclusive approach for Creation Care
  - ・ B31(山口希生師): Theological issues with Main speaker Richard Bauckham
  - ・ B32(立石充子姉): Open discussion session with LWCCN leaders
- ④ Topical Discussion Forum(李兄と青木兄)：A31 の実態を詳細に報告。
- ⑤ Regional Plans drafting(青木兄)：下記 Japan Report
- ⑥ 祈禱支援：品川淳兄、渡部信師、大井満師、田島かをる姉

8) 各国グループの予実績

- ① 参加者のリクルート結果、中国本土と韓国本土からの参加者はゼロとなった。
- ② 各国の国内協働提案や東アジア諸国による協働提案を検討するプログラムを組み込むには至らず、ポスト EAC に期待される。
- ③ 従前地域会議の要件整理や未来展開について照会を繰り返したが、応答なし。これも知見データベースの構築・整備としてポスト EAC に期待される。

9) TED Plenary 22(汪中和教授の「世界規模での温暖化と私たちの未来」)へのコメント

- ① 課題の指摘には、9.11 や熊本地震が言及されていた。その直前のプログラムに組み込まれていた



Regional Picture(Japan)において、横田法路師の震災支援対応への感謝表明と情報共有による祈禱課題の提示があったことは、タイムリーな事前報告として有効であった。

- ② 台湾の若手研究者から、課題の指摘に対する具体的な対策への照会があったが、「個人的には対策を持っていない」との応答に、次世代に継続する課題と受け取られた。

#### 10) TED Plenary 23(Sumita & Ogawa)へのコメント

- ① 農家との教会の連携について香港参加者からの予算照会に対し、「予算ゼロ」と応答。→ 商取引ベースモデルであるにも係らず資金計画がないケースは、目標達成の日程計画がないことを意味するのでは。従って、実績がほとんどないモデルについて、日本で如何にオーソライズされ、この会議のプログラムで広報されているのか、選定や評価の経緯を把握したいとの照会が香港・台湾からの参加者から寄せられた。

### 3. Regional Plans drafting

- 1) 歴史観と世界潮流： 東京オリンピック(1964~2020)とマケドニアの首都スコピエ地震対応(1963)、成長の限界(1972)や石油ショック(1973/79)と宣教会議第1回(1974)の関連を概説。ODA(54)や震災復興を担う Islam/Hindu/Buddhist のチーム、JICA(1974)と NGO、教会と個人を含む国際協力 60 年にわたる 3 世代包括的アプローチ Holistic approach を概説。因みに、それは戦争を知る最後の世代が平和憲法(日本国憲法 9 条)の 70 年を守ってきた経緯と整合する。→ ローザンヌ運動が創成される 1960 年代より前から、教会ではなく個人ベースで多様な受け更に参加し、Creation Care and the Gospel に取り組んできた経緯があり、課題に向けた教会ネットワークの形成は大幅に遅延していると思われる。
- 2) 「包括的なアプローチ Inclusive approach for Creation Care」: JCE6 プロジェクト「ビジネス宣教協力の次世代構想」(未来 2020/2030/2050 をめざし、多文化共生社会における共存・協働により、社会変革・未来貢献を担う次世代グローバル人材を支える宣教協力)として、「被造物保護に向けたビジネス宣教協力とディアスポラ宣教協力」の事例紹介(益裁、ADRC 創設、日冷フレッシュ提案、ダイキン提案、絆フェスにおける SAFCA 提案、サンゴ礁回復、有機食物開発、EFG 運用、サタンの攻撃対応)を通し仕える教会や持続可能な社会の整備にも言及。特に、国連、政府・自治体や NGO/NPO が協働推進する各プロジェクトによる共通価値創造 Creating Shared Value(CSV)を担う国際家族・国際人による包括的な宣教協力が提示された。ダイキンエアコンは台湾構想鉄道に利用されており、香港や台湾の参加者から反響があった。ANRC Open Forum や
- 3) Anti-Creation Care Issue 対策： 戦争やテロの攻撃に直面する立場の人々に共通するもので、再発防止や予防措置を含むリスクベースアプローチなどを含め、耐え忍び乗り越えつつ、仕事を遂行し、かつ宣教を拡大すること、それに必要な激励メッセージを支える神学的アプローチの整備が期待されている。

### 4. メインスピーカー(新約聖書学者 Prof. Richard Bauckham の講演)

- 1) Creation: Value and Community 「創造」: 創世記 1 章より、神は被造物世界に秩序を定めたこと、神は生物の多様性を喜ばれたこと、すべての被造物は神を賛美するために造られたこと、そして神は人間を含む被造物全体が地上に繁栄することを希望された。
- 2) Reconciliation: Creation as Gospel Concern 「救済(和解)」: 「福音」は人類は元より被造物全体の救済に及ぶものである。コロサイ 1:15-20 より、キリストの救いによる和解は神と被造物(人間を含



む)、被造物同士、被造物全体の和解と理解する。

- 3) Eschatology: Hope for All Creation 「終末(新しい創造)」: 新天新地は未来に別世界が創造されるのではなく。現行世界の更改・刷新と理解する。被造物保護は希望でありそれを実現することは人間の責務・希望である。
- 4) 補足: 大会受付(17.08.24)の直後、Prof. Richard Bauckham に以下を照会したところ、大会期間中検討するとのコメントを頂いた。が、それ以降コミュニケーションする機会が数回あったものの、回答を頂いたり確認する機会が持てなかった。
  - ① Creation Care and the Gospel に関する基本構想の Chapter 3(Ecological Hope in Crisis)の「信仰・希望・愛」の記述について励まされたことを思い出し、今次講演に期待していることを会話させて頂いた。
  - ② Creation Care に向けたビジネス宣教協力を支えるディアスポラ宣教協力について、包括的なアプローチ(Holistic approach という表現ではなく、多様と包括 Diversity & Inclusion の観点から Inclusive approach と表現した)に取り組んできた経緯をふまえ、Anti-Creation Care Issue 対策の緊急対応の必要を概説した。
  - ③ Anti-Creation Care Issue 対策: 戦争やテロの攻撃に直面する立場の人々に共通するもので、再発防止や予防措置を含むリスクベースアプローチなどを含め、耐え忍び乗り越えつつ、仕事を遂行し、かつ宣教を拡大すること、それに必要な激励メッセージを支える神学的アプローチの整備が期待されていることをお伝えした。

## 5. 今後の活動

### 1) 宣教協力の広報外交

- ① IPWG への提案
- ② クリスマン新聞への記事提供
- ③ 日本ローザンヌ委員会のビジョンリトリート(17.08.21-22 箱根)
- ④ Young Professionals Forum(17.09.18)
- ⑤ JEA 宣教フォーラム in Kobe(17.09.25-26 神戸)
- ⑥ ANRC Open Forum 4(17.10.07 東京 OCC)

### 2) LWCCN/IPWG への提案

- ① 対象範囲や対象領域の拡充
- ② 事例拡大に伴う Issue 連携による Issue Network(37ヶ 2010)の集約アプローチ: Arts, Buddhism, Business As Mission, Children and Evangelism, Children at Risk, Church planting, Church research, Cities, Creation Care, Diasporas, Disability Concerns, Freedom and Justice, Health and Mission, Hinduism, Integral Mission, Integrity and Anti-Corruption, International Student Ministry, Islam, Jewish Evangelism, Leadership Development, Least Evangelized People, Marketplace ministry, Media Engagement, Men and Women in Partnership for Gospel, Mental Health and Trauma, Ministry Fundraising, Ministry Partnerships and Networks, Orality, Personal and Small Group Ministry, Proclamation Evangelism, Reconciliation, Religious Liberty, Scripture Engagement, Study of Global Christianity, Technology, Tentmaking, Women in Evangelism





- ③ 事例拡大に伴う国連 SDGs(17 目標案 169 ターゲット 2015)との連携強化 : No poverty (No poverty), Zero hunger (Zero hunger), Good health and well-being (Health), Quality education (Education), Gender equality (Gender equality), Clean water and sanitation (Water/sanitation), Affordable and clean energy (Energy), Decent work and economic growth (Economic growth), Industry, innovation and infrastructure (Infrastructure/industrialization), Reduced inequalities (Reduced inequalities), Sustainable cities and communities (Cities), Responsible consumption and production (SCP), Climate action (Climate actions), Life below water (Oceans), Life on land (Forests/biodiversity), Peace, justice and strong institutions (Peace/governance), Partnerships for the goals (Partnerships):、MDGs では十分対応しきれない新たな課題(気候変動や生物多様性の保全等)や、MDGs 達成後もなお残された喫緊の課題(失業人口の増大、食糧価格の高騰、所得格差の拡大等)で構成されている。
- ④ 地域大会の知見データベース整備 : 情報共有により、地域間連携や国際的課題の展開を促進する工夫が求められた。

### 3) Creation Care 事例の知見拡大

- ① 持続可能な認証 : MSC(海洋管理協議会 1997)と ASC(水産養殖管理協議会 2010)は、WWF(世界自然保護基金)が創設支援の非営利組織。Forest Stewardship Council(森林管理協議会)。
- ② エコラベルのガイドライン:FAO(200.03 採択):水産エコラベル Marine Eco-Label Japan(2007)、養殖エコラベル Aquaculture Eco-Label(2014)、Tokyo2020 : 持続可能性を配慮した調達拡大
- ③ 食品リサイクル法(2001) : 食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律
- ④ APEX(Asian People's Exchange): アジアの人々の生活向上や環境保全をめざす国際協力 NGO
- ⑤ 低炭素社会実現に向けた再生可能エネルギーRenewable Energy や水素エネルギーHydrogen Energy の活用
- ⑥ その他

### 4) Anti-Creation Care Issue の知見拡大

- ① 国連広報センター : 国際テロリズム
- ② テロ資金対策の情報
  - ・テロ資金供与防止条約(1999.12 採択) : 締結国 187 ヶ国(2015.08)
  - ・G8 首脳共同声明(2001.09.19)
  - ・G8/G7、国連、FATF(Financial Action Task Force)、APG(アジア太平洋マネーロンダリング対策グループ)
- ③ テロとの戦いのための国家戦略 National Strategy for Combating Terrorism(USA 2003)
- ④ テロ予防のための開発援助協力(ODA) A Development Co-operation Lens on Terrorism Prevention(OECD 2003)
- ⑤ 日本のマネー・ロンダリング法である犯罪収益移転防止法 : 改正(2014.11)、施行(2016.11) AML/CFT(Anti Money Laundering and Combating the Financing of Terrorism)、
- ⑥ 神学的アプローチ : エペソ 6:10-20、1 ペテロ 4:7-19、黙示録 22:10-13

### 5) その他

以上



石原謙治

## 【はじめに】

志学会の方からローザンヌ委員会に紹介していただき、カンファレンス参加の機会をいただきました。出会った方々、重荷を負って準備をしてくださった方々に心から感謝しています。

## 【報告】

アメリカの神学校で神学修士を修め、牧師にならずに国際環境 NGO で働くこととなった自分にとっては、信仰、学び、仕事を振り返り統合する意味深いカンファレンスであった。

Ed Brown は国連が定めた人類の危機の一つとして、環境問題を取り上げ、それは今の世代のうちに解決しない問題だと述べた。また「環境問題は福音の問題」というテーマで、講師のリチャードボウカム博士は被造物の贖いについて、地球環境を含む全てのものは贖いの対象になると述べた。コロサイ 1:15-20 の「万物」の解釈が全ての被造物になりうると提唱した。しかし、解釈を広げるだけで、被造物の全てが贖い・和解の対象になるのか、キリスト教神学の根本にチャレンジする内容に、参加者の間でも議論が分かれ、今後さらに議論が必要と感じた。

個人としては、食から考える環境問題についてワークショップを行った。農薬と生物多様性について仕事で実践している内容を神学的に振り返り、食という消費を通して、被造物の保護を実践できることを述べた。30 分のプレゼンに 30 分の質疑応答を持ったが、各国の参加者からたくさんの質問を受けた。特に自分のプレゼンに興味を持ってくれた人が、ミニストリーのスタッフから農学者まで多岐に及んでいたため、一社会人（それでも若干特殊な立場だけ）として、今後、セキュラーな働きと Creation Care をつなげる重要さも実感した。さらに、東アジアは食文化が似ていたり、貿易が盛んなので、今後東アジアコミュニティでさらなる議論が必要だと提言した。原稿は別の機会にまとめたいと願っている。

日本の教会は、戦争や国家権力、近年では自然災害について高い意識をもっている傾向があるが、これらは起きてしまった問題への振り返りや反省が多い。もちろんそれらも大事だが、環境問題はとりわけ起きてしまったから対応するのでは遅すぎる分野の一つなので、問題が可視化する前にどう防ぐかが極めて重要である。教会や神学もこの事に応答できるよう、仕事や学び、教会生活を通してこの分野を発展させていきたいと願う。

課題がたくさん見つかり、宿題をたくさん持ち帰った気がしているが、東アジアコミュニティにとって意義ある話し合いに参加でき、感謝と期待にあふれている。



## クリエイションケアと「関愛」(ケア)

小川真

「この『関愛』という言葉は、中国語で『ケア』という意味なんだ」。そう香港の兄弟が教えてくれたのは、最終夜の「夜市」の時間のことだった。チラシの中にある中国語を見つけ、これはどんな意味かと聞いた時の出来事だった。「関愛」。とてもいい言葉だなと思った。ケアとは、神の造られた世界に「愛を持って関わること」だと。この「関愛」とは、まさに、今回のクリエイションケアの会議で教えられたことをまとめるような言葉だなと思わされている。

今回、東アジア被造物保護会議に参加をできたことの恵みの一つは、各国で環境問題に取り組んでおられる方々の生きた証しを伺えたことだった。私は、環境コンソーシアムのメンバーとして、諸教会に環境問題が福音の問題であることを伝える取り組みをしている。ただその取り組みはなかなか困難で、どのような形で教会の方々を巻き込んでいくか、の知恵が欲しいと思っていた。

大会中、英国で活動されているロブ・フロスト氏から、三つの神学校で(ひとつはオールネイション)、短期宣教師への学びとして環境問題を教えているということを知ってとても驚いた。魂の救いのことだけでなく、ホーリスティックに宣教をするために、環境問題の取り組みの大切さを教えているとのことだった。環境コンソーシアムとしては、神学校での講義に「福音と環境問題」といったものを組み込んで欲しいとの願いを持っているので、このような話を聴けたことはひとつの財産となった。

大会を運営していたサミュエルさんからは、ネイチャーキャンプの実践についてのアドバイスをいただくことができた。子どもたちを自然の中に連れて行き、カヌーで沼を越え、テントを張り、自然を肌で感じていく。そのような取り組みをかつてされていたと伺った。サミュエルさんは、「次世代の育成が大事だ」と言われた。日本でも、アウトキャンプなどの取り組みをしているキリスト教団体がいくつもある。そのような方々との連携が、今後の鍵となっていくように思っている。

「果たして、富士山は贖われるのか？」との議論を、ボウカム先生を囲んで、住田先生・山口先生・横田先生とやりとりしたことも楽しいひと時だった。キリストが全被造物を良き世界として作られたゆえに、贖いは全被造物に及び、新天新地にも「完成した富士山」があるという話は、ダイナミックで、日本人の胸を打つ、良いトピックだなと思った。

帰りの飛行機、太陽の光が雲を赤く染めていて、綺麗な夕日が見えた。九州の上空を雲が覆っていた。その時ふと、神様は雲によって私たちを暑い日差しから守り、オゾンによって私たちを有害な紫外線から守ってくださっていることを思った。それは神ご自身が、愛を持って、地球を覆ってくださっていると気づいた瞬間だった。神様が愛を持って造られた世界を、「関愛」できていない状況があるが、福音を知っているゆえに、感謝を持って被造物管理に関わっていきたいと思わされている。



2017年7月24～28日に台湾(新竹市)で行われた「The Lausanne/WEA East Asia Regional Conference on Creation Care and the Gospel」に参加することができました。感謝でした。

個人的なことになりますが、私は1947年生まれ(団塊の世代)で、高度成長時代に青春を過ごしました。東京オリンピック(1964年)の前の日本、特に東京などの大都市は公害(大気汚染、水質汚濁、騒音、振動、悪臭、土壌汚染、地盤沈下)が多発し、人と地域環境に深刻な影響を与えていました。クリスチャンとして就職するにあたって、何をすべきなのかと考え、公害の一つである水質汚濁の防止に興味があり、この改善に寄与しようと考え、東京都に入りました。以降、水質汚濁を解決し、人の住環境を守る東京都下水道局で働きました。また、聖書を学ぶために夜間の神学校に入りました。30歳の時に、開拓伝道を開始し、以降、テントメーカーとして歩んでいます。私にとって、公害とその背景にある人の価値観は大きなテーマでした。公害を起こすのは「人」であり、地球環境問題を起こすのも「人」です。

日本では、一応、見た目には公害問題は解決したとされています。しかし、新たに、地球環境問題がクローズアップされています。私の専門は排水処理です。水に関しては、21世紀は水をめぐる戦争の時代だとされています。水と衛生(持続可能な開発目標)に関して、特に発展途上国では深刻な問題です。

聖書の言葉を預かる牧師として、環境問題の背後にある人間の思い(飽くなき欲望であるむさぼり)と地球環境諸問題は、大きな関心ごとです。世の中は、地球環境問題は、制度上の問題、システムの問題、技術上の問題であり、これらを解決すればよいと考えます。地球温暖化を防ぐ技術としてジオエンジニアリング(地球の改変)がまことしやかに議論されています。キリスト教会の中では、環境問題にあまり関心はなく、地球環境問題とクリスチャンとしてのライフスタイルを切り離しているようです。世の中と同じ価値観をもち、地球環境問題を引き起こしている「人」との関係は話題になっていません。1974年のローザンヌ運動は興味深いもので、シンプルライフ(簡素な生活様式)の提案は同意できます。

地球環境問題の中で「生物種の絶滅のスピード、生物多様性を支える生態系の崩壊」は、深刻な問題となっています。この課題に対して1992年5月に「生物多様性条約」がつけられ、具体的な対策が実行されています。従って、クリエーションケアについては関心の高いものでした。

今回の会議でクリエーションケアの会議で、東アジアでのクリスチャンが行っている活動を知ることができました。活動はクリスチャンが環境保護団体などで行っているという視点で述べられているという印象を受けました。各国でのクリスチャンとしての取り組みの側面の一部を知ることができました。合わせて、環境問題の事例の把握の仕方、対応は世の中と似ており、キリスト教の信仰(聖書)から環境問題の原因の評価、対応の原理・原則はあまりなされず、また、評価基準が不明確なように感じました。

地球温暖化問題について、自然再生エネルギーとして太陽光発電、風力発電が提唱されていました。太陽光発電は太陽光パネルを設置します。このパネルで覆われた生き物の生息空間、生態系はどうなるのでしょうか。風力発電はバードストライクや低振動の問題があります。また、太陽光発電、風力発電の設備や機械が廃棄された後の処理は、ほとんど議論されていません。クリエーションケアについて、その内容を深めたいと願います。





## ローザンヌ運動

世界宣教のために影響力ある人々とアイデアを互いにつなげる

LWCCN EA Conference 参加者レポート

アントロポセン<sup>1</sup>で現代を区分すること、地球温暖化を防ぐジオエンジニアリングが話題になっていますが、このような状況を聖書から早急に評価する必要があると思います。地球環境を改変し、生物種を絶滅させている人の活動における「人の罪」に対する認識はあるのでしょうか、そんなことを感じました。与えられた課題を信仰の課題として粛々と行っていきたいと願います。良い学び、交わりの機会でした。ありがとうございます。

---

<sup>1</sup> anthropocene 人新世◆人間が地球の生態系や気候に大きな影響を及ぼすようになった、18世紀後半の産業革命以降の時期を指す言葉。そのはるか前、農業の起こった時代以降を指す場合もある。◆【語源】ノーベル賞を受けた大気化学者 Paul Crutzen の 2000 年の造語。(出典：英辞郎 on the web)



それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。 エペソ 1:6

『東アジア・被造物保護会議(クリエーション・ケア・カンファレンス)』への参加を通して、主の恵みに圧倒されるような日々をすごさせていただきました。

神が、土、人や動物、虫や鳥、目に見えないいのちあるもの、そして宇宙も、すべての被造物をお造りになったということ、今回の学びとそれまでの数ヶ月間を通してはっきりと信じることができました。

そして、お造りになっただけでなく、今もあわれみと恵みによりこの世界すべての営みを支え続けてくださり、神の前にあって私たちはひざをかがめひれ伏し、へりくだって神を賛美する者として造られたものだというのを改めて感じました。

私の住んでいる、主人の育ったこの場所は、4~50年前までは一面田んぼでした。今この周辺を見渡すと、この十数年間の区画整理後、更に蓋をされたような大地にひしめく住宅、草むらさえほとんど無くなり、虫も鳥もかつてのように住めなくなった大地。もしかしたらいずれ人の声しか聞こえなくなるのではと思わされる環境。農地はほぼ消え、大地から食べるものを作れなくなって消費するだけの私たち。そのことを少しもおかしいと感じなくなっている人々の心。

時に、私自身が息苦しくなりますが、神様は、詩編 104 篇によってもご自身の造られた自然の素晴らしさを味あわせてくださり、そして、語りかけてくださいます。足もとの小さな草むらにも、創造の世界が広がっていることを教えてください。一匹の虫が、一羽の鳥が、一本の木が、神様の創造のわざの美しさを見せてくれ、虫の声や鳥のさえずりにうっとりさせられ、木々は葉の芽吹きから紅葉、落葉を通して季節の移ろいを知らせ、楽しませてくれます。目を向けさえすれば、そこに神の備えられたいのちの営みが見えてきます。

私たち夫婦は、この場所に生かされていると意識し、自家焙煎の珈琲屋(喫茶と豆売り)を営み、出会う方々に暮らしの中での何気ない気づきを通して、神様の愛をお伝えしたいと願っています。

「瑞江澤通信・足もとの自然と一杯のコーヒー」というみことば入りニュースレターを不定期発行しながら、よい意味で何かを感じ取ってくださった方が、ご自身のできることに繋げていってくださることを祈っています。

クリスチャンはこの時代をこれから先にどのような希望を持ってどう生きるべきでしょうか。いつの時代もどの場所でも、私たちのすべきことは神と心をつなげてみこころを行っていくこと。自分自身の弱さを認めながら、祈り祈られ、互いに愛し愛されること。毎日が「初めに、神が天と地を創造した。」このみことばによって心新たにされ、人は特別に造られたものでありながらも被造物の一部であるという思いをもって、神様に喜ばれるようにいのちの営みに参加すべきだと思いました。

それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。 マルコ 10:27

このみことばを度々思われる数ヶ月でした。3月に A Rocha Canada の方から今回の会議への参加を勧められましたが、その時には内容も全くわからないうえに台湾という海外。言葉(英語が話せない)の問題をはじめ、様々なことが行けない理由として頭に浮かびます。この会議への参加は私にはありえないことだと心の中で思いながらも、同時に導きも感じるのだから真剣に祈る必要があるとも思い、揺れ動きながら約1ヶ月間祈りました。

祈っていくうちに、数年来考え体験させられたことが浮かび、会議への参加を勧められた日に聞いた説教「被造物全体が共にうめき共に苦しんで(ローマ 8:18~30)」や、昨年末に初めて聞いた言葉「クリエーション・ケア」というものをもっと知りたいと思う気持ちだけが募ります。

ある日の祈りの中で、「あなたは、わたしについてきなさい」と心に語りかけられ、そして平安が来ました。更に確信を求めて祈りつつ、ついてきなさいとおっしゃるイエス様にお従いしようと決めた時、不安はすべて消えました。帰国後は、英語への苦手意識もなくなっていました…驚きです。 **どんなことでも、神にはできるのです!** 今回の恵みは、これからじわりじわりと私の心の中に、そして周りの方々に広がっていくことを感じています。多くの働き人によってこの会議が準備されたことを思い、心より感謝いたします。ありがとうございます。

自家焙煎珈琲 cafe BLESS me 田島かをる 東京都江戸川区在住

## 出会いを用いられる主

立石充子

イギリス人のデイブ・ブックレス氏は、インドで生まれ育った。自身が結婚後、インドで過ごした休暇の終わりに、地元の人に教えられて向かったゴミ捨て場で、神様の声を聞いた。「あなたたちが私の地球に対してやっているのを見て、私はどんな気持ちでいると思うかね？」そこから始まり、氏はア・ロシヤというクリスチャンの国際的環境保護団体のスタッフとなった。ア・ロシヤは、今回の東アジア被造物保護会議のスポンサー団体の一つでもある。



農場見学後、ここでとれたハーブで  
お茶のもてなし

26日午後の実地見学で、私は有機農場を訪問した。リーダーの女性は、台湾原住民族出身で、都会で働き、結婚、出産後、娘の学校のクラスメートの男の子と出会った。彼も原住民で、困難な状況にあった。放課後にこの男の子に勉強を教え始め、徐々に放課後に集まる子どもの数は増えていった。資金もなく、事態が収拾不可能になりかけた時、自身の会社などから資金提供を受けて、複数世帯が共同生活しながらの有機農場が立ち上がった。

主は一つの情景、一つの出会いを用いて、大きな働きを始められる。私にとって、今回の会議の準備に関わり、台湾に行くことになったこと自体、思いがけない展開だ

った。多くの出会いがあった中で、主が次に開いてくださる扉は何なのか、思い巡らしている。

人間の幸せは、他の被造物の幸せなしにはあり得ない。主講師のボウカム氏の聖書講解を通して、教えられたことの一つだ。まずは、我が家の家の教会の6名のレギュラーメンバーという、傷ついた「被造物」を愛し、ここに愛し合う共同体を立て上げていくことを大切にしたい。一緒に住むこと、あるいは同じ建物に住むことを通して、日々励まし合い、その姿をもって証しすることができるよう、具体的に祈っていこう。



## 「被造物保護と福音」国際会議と災害支援

横田法路

### 1. 災害支援を支援する神学の必要性

自然災害を通して、人はさまざまな喪失体験を余儀なくされる。家、車、持ち物、財産、仕事、健康、家族、ペット、コミュニティ、ふるさと（自然の風景）など。このような喪失体験は、自らのアイデンティティについて深刻な危機をももたらす。「自分は何者であるか」というアイデンティティは、特に、地方においては、持ち物や仕事だけではなく、家族、コミュニティ、ペット（動物）、ふるさとの風景（自然）、そしてそれらと結びついた思い出（ストーリー）によって形成されている。

そのような危機の中にある方々が必要としているのは、「天国行の切符」としての福音だけではなく（その重要性を否定しているのではない！）、人間はもとより、動植物も含めた被造物全体に関わる福音ではないだろうか。実のところ、聖書が全体として語っている福音とは、そのような「万物の和解」としての福音なのである。

### 2. 「万物の和解」の福音と災害支援

今会議のリチャード・ボウカム博士の主題講演は、そのような「万物の和解」の福音理解の道筋を明確に示してくれた。それでは、このような福音理解は、わたしたちの災害支援の在り方に、どのような変化をもたらすであろうか。以下の四つの取り組みを提示したい。

#### 1. 悔い改めとライフスタイルの見直し

ほとんどの自然災害は、被災者にとっては、不可抗力的なものである。したがって、被災者の側に問題があると言うのではない（ルカ 13:1-5）。自然災害の真の問題は、わたしたち人間一般の、特に、世界の中の富める集団に属するわたしたちの人間中心主義で、自己中心的ライフスタイルが、世界の気候変動や生態破壊に大きな影響を与えているということである（全被造物の「うめき」）。このようなライフスタイルを悔い改め、変えていくことを始めなくてはいけない。特に、欲望を過剰にかきたてる消費文化の影響下にあるわたしたちは、「もう十分！」と言うことを学ぶ必要がある。

#### 2. 大きな希望を抱きながら、小さな取り組みを大切にする

人間を含む全被造物はうめいているが、キリストが成し遂げられた十字架上の贖い（和解）のみわぎの射程は、人間だけではなく、全被造物を含んでいる。神と人の和解、人と人の和解だけでなく、人と他の被造物との和解も含まれている。そのような神の新創造のわぎは、新天新地において完成され、神の全被造物に対する目的がすべて成就するのである。

そのような神の遠大な救いの計画（「究極の希望」）を心に抱きながら、目の前の小さな取り組みを大切にしていく。なぜなら、神の恵みの働きは、一見すると、小さく、弱々しく、目立たないように見えるものの中から、始まるからである。

「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」

（マタイ 13:31-32）

始まりはどんなに小さくあっても、神の恵みの支配は拡大し、やがて全世界を覆うまでになる（究極の希望）。あくまでそれは神がなされる業であるが、わたしたちは、小さなことの中に働かされている神の恵みのわざを見、信頼し、それに参与するように招かれているのである





## ローザンヌ運動

世界宣教のために影響力ある人々とアイデアを互いにつなげる

LWCCN EA Conference 参加者レポート

わたしたちの被災地支援の働きは、被災地のニーズ全体からいえば、本当に小さな働きであることを率直に認めなければならない。しかし、からし種のような小さな働きの中にも神は共におられ、確かにみわざをあらわしてくださっている。さらに神は、不思議な導きをもって、その働きをも育てて下さるのである。だから、小さな働きが、大切なのである！

### 3. 良いわざは、それ自体に価値がある。

近代の進歩思想との違いを意識することは大切である。良い働きは、進歩との関係でその価値が測られるのではなく、良い働きは、そのこと自体に価値があるのである。さらにそれは、新創造される世界の中にも、見出されるのである。

「だから愛する兄弟たちよ、堅くたって動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。あなたがたの労苦は、決して無駄になることはない知っているからである。」(1 コリント 15:58)

主の喜ばれる働きは、どのような成果を生み出したかどうかにかかわらず、そのこと自体に価値があるのである。そして来るべき世界においても、その働きは価値があるのであって、何一つ無駄になることはない。

### 4. 「被造物コミュニティ」再生のビジョン

神は、人間だけではなく、人間と共に、動物も植物も愛している。それらはみな、神によって造られたものであり、大局的に見るならば、互いに助け合う仲間 (fellow) 関係にある。人間は、神が被造物をケアしておられるように、他の被造物をケアする役割と責任が与えられている。キリストの贖いのみわざに信頼しつつ、人間の役割と責任を再び果たすことを通して、シャローム (平和) を実現する「被造物コミュニティ」を形成していく。他の被造物と共に礼拝し、共にうめき、共に希望をもつコミュニティの再生 (贖い) である。これは被災地のコミュニティ再生支援において、大切な視点を提供している。

たとえこの世界でそのようなコミュニティの再生が完成することはなくとも、究極の希望の方向に向かって、歩みを進めていくことが大切なのである。そのこと自体に価値があるからであり、また、神はその小さな働きをも用いて下さることをわたしたちは知っているからである。



## ローザンヌ運動

世界宣教のために影響力ある人々とアイデアを互いにつなげる

東アジア被造物保護会議に参加して

LWCCN EA Conference 参加者レポート

一般財団法人日本聖書協会 総主事 渡部 信

今年の7月24日から28日にかけて、新竹市（台湾）の聖書学院で行われた東アジア被造物保護会議に日本から13名が参加した。総勢100名を超す出席者が韓国、香港、台湾、モンゴル、日本から集ったほか、ローザンヌ会議米国地区から10名近くのコーディネーターが参加した。メイン講師のリチャード・バックム氏が3日間に渡り基調講演を行い、それぞれの国から自然保護に携わる方々の報告、研究発表、討論会などが非常に歯切れの良いテンポで進み、あっという間に5日間が過ぎた非常に充実した会議であった。

異常気象（天候）は、私たち誰もが感じている自然の脅威であり地球温暖化は確実に進行しているが、まだ何となく許容範囲だと慢心している私たちにとって「待った無し」の事象である。

この異常気象は、主にエネルギー消費拡大によるCO<sub>2</sub>排出に関係している。しかし、この会議は、人類が経済的発展を優先させ自然界の秩序を破壊しているという観点から、遺伝子組換えによる食糧の問題も含んだ形でこの問題に焦点を当て、神からのメッセージを学ぶという意図のもと、企画された。

リチャード・バックム氏の講演は、1日目は「被造物：価値と共同体」、2日目は「和解：福音的見地から被造物」、3日目は「終末論：全被造物への望み」という非常に膨大なテーマ——つまり創造論から、被造物、神と人との和解、そして終末論における新天地——という聖書的枠組みから丁寧に論じた（原稿付）。そして創世記、詩編、ヨエル、パウロ書簡などの聖書の記述を絡ませながら、「神と自然（被造物）と人」の関係は、神と人との和解によって正しい関係となる、つまり神と和解した人は、同時に他の被造物に対しても横柄に振る舞えないはずだ、被造物全体が人と共に贖いの業に参加して行く。簡潔に言えば、神と和解した私たちは「神の新しい被造物として共存して行く」。これがバックム氏の結論だと私は受け止めた。

他の参加者の報告や発表でも、自然と食糧問題、自然環境の保護、貧困や災害救助（人與人）等の課題が扱われたが、こちらは具体的なデータや実際の活動報告なので、実践における行動として説得力があった。

今回の会合を通じて思ったことは、自然保護の問題が叫ばれたのは直近の100年であり、急激な人口の増大とそれを賄うエネルギー量が拡大し、貧困から物質主義という全く新しい渴望が、怒涛のごとく現代に襲い掛かって来たことに起因している、ということだ。地球上の自然環境の限界点が見えた今日、神から与えられた被造物を大切に扱う意味で、被造物の保護は確かに推奨されなければならない。同時に65億人の人口がこれから25年後には更に30億人増えて90億人になる世界において、どのように人類の生存を維持していくのか。防御だけでなく積極的な面も考えなくてはならないだろう。いたずらに自然災害の恐怖を語るのではなく、被造物の保護は、同時に被造物との共存でもあり、賢い利用も任せられている。聖書の言葉一つずつをキリスト教信仰と関連させ無理矢理に結びつけると、信仰者独特のこじつけイデオロギーになってしまう危険性もある。既にアーミッシュや他のプロテスタントのセクトにも垣間見ることができる。ノンクリスチャンと日常レベルで共同してこの問題の解決方法を模索する過程が大事であり、その過程でクリスチャンの信仰理解・姿勢に共鳴するなら、素晴らしい福音、新しい新天地への招きとなるだろう。恐らく贖いの業は反文明的なものではなく、文明的なものであり、誰においても福音の機会となるだろう。特に自然災害は、贖いの視点からこの課題を多くの人と自由に分かち合うならば、ノンクリスチャン（他宗教の人々）とも共同できる素晴らしい働きとなるだろう。